

伝統文化の継承に 配慮した復興まちづくり —原点からの出発—

Reconstruction city planning which considered accession of traditional culture
—Starting from origin—

〔座談会メンバー〕

森一欽 釜石市教育委員会事務局生涯学習文化課課付係長(文化財担当)

石塚昌志 名取市副市長

新妻香織 (一社)東北お瀬路プロジェクト理事長

〔司会〕

小山田哲也 編集委員

2015年4月15日(水) 名取市役所会議室にて

まちが培ってきた独自の伝統、歴史、そして物語……。これらを掘り起こすことによってまちづくりの方向付けを行い、復興につなげようとする三つのアプローチを見てきた。ここでは、それぞれの取組みの中で配慮している点や課題、今後のまちづくりに求められるものなどについて議論する。

海との密接な関係を 引き継ぐ「現地再生」を決断

—みなさんはそれぞれの地域で復興まちづくりに取り組んでおられます

すが、活動の中で伝統文化を継承していくことをどうお考えでしょうか。

石塚 宮城県名取市関上地区の再生事業に取り組んでいます。関上というのは、非常に歴史のあるまちです。

日本一長い運河である貞山運河の中で、最初に掘られたのがこのあたり。仙台の城や城下を築くのに、阿武隈川上流で切り出した材木を貞山運河から名取川、広瀬川という経路で運んだ。その際の拠点が関上でした。つまり、仙台よりも古いのです。また、関上から五十集と呼ぶ行商が、内陸に位置する仙台へ魚を売りに行っていました。関上は仙台との関係が深く、漁村らしい佇まいを持った伝統ある地域でした。

津波によって壊滅したこのまちを復興するにあたって、現地に再生するか、もつと内陸に再生するかで意見が分かれました。そんな中で、まちの歴史を継承し、また海や川との関係を引き続き活かしていくために、市は現地再生を決断したのです(写真1)。

—その判断は地域の方々の話し合いによって形成されていたのでしょうか？

石塚 実は、今でも地域全体で合意形成が完了しているわけではなく、現地再生に反対の人もいます。ただ、共通しているのは、みんな関上が好きで、「ここはいいところだ、人間もみない人だ」と思っていること。お年



写真1 関上に再建中の防波堤



新妻 香織 氏

NIITSUMA Kaori

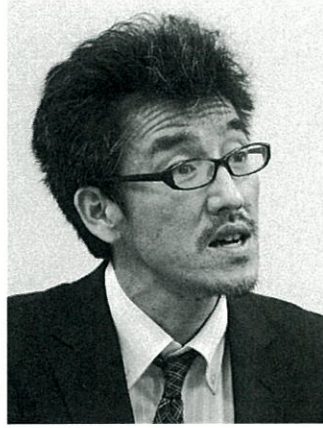
1960年福島県富岡町生まれ。相馬女子高校を経て、日本女子大学国文学科卒。JTB出版事業局・雑誌編集者を経て、30歳から5年間、アフリカに移住。帰国後から福島県相馬市に在住。1998年「NPO法人フー太郎の森基金」を創設。エチオピアの世界遺産・ラリベラに273万本の植林、8つの溜池造成、3つの学校を建設。2010年外務大臣賞受賞。2000年松川浦の環境保護団体「はぜっ子倶楽部」創設。東日本大震災後は、「(一社)ふくしま市民発電」と「(一社)東北お遍路プロジェクト」を創設。現職、相馬市市議会議員。被災地復興に取り組む。



石塚 昌志 氏

ISHIZUKA Masashi

宮城県多賀城市出身。1980(昭和55)年東北大学大学院土木工学専攻修了。同年、建設省入省、北海道開発局を経て、建設省、国土交通省では都市局、河川局、東北地建など、都県では、石川県、東京都、市では堺市、岡山市、公団などでは都市再生機構などに勤務し、復興庁を最後に2014(平成26)年3月に国土交通省を退職。主に土木事業を中心に、まちづくり、道路事業、河川事業などに携わる。2012(平成24)年2月の復興庁発足時から、被災地に常勤し、宮城県北部の市町と国との調整を行ってきた。現在、名取市の副市長として関上などの復興に努めている。



森 一欽 氏

MORI Kazuyoshi

國學院大学、法政大学大学院にて考古学を専攻し、2001年4月釜石市役所入庁。教育委員会に文化財調査員として配属され、現在に至る。専門は考古学。市職員となつて以来、郷土資料館移転整備や橋野高炉跡の発掘調査、世界遺産登録推進、市内の文化財、産業遺産を軸とした産学官の連携などに従事。郷土資料館を主として震災や戦争についての資料整理、公開とともに、防災教育、平和教育への活用方法及び継承方法の検討にも従事。

史を活かしたまちづくりを模索しているところ。被災後、私的にグループをつくって再生の方向性を話し合ったところ、若い人を中心に多かったのは、「海辺を再生したい」と

いう意見でした。けれども、三陸地域はみな海があつて、同じような港を形成している。その中で特性が出せるのか。もつと釜石だけのものがあるだろうと考えたときに、浮上してきたのが「製鉄」でした。この近代産業遺産をまちづくりに活用していこうと。その一環として日本で初めて洋式の製鉄が始まった橋野鉄鉱山の世界遺産登録を目指しています。

釜石の人たちにとって、「製鉄」はあまりに身近過ぎたために、特長として認識されていなかったのではなか。森——釜石市は1964(昭和39)年に、人口10万人近くまで栄えていました。そのあと斜陽になり、震災直前で人口は4万人を切っていました。「鉄冷え」を経験した人たちにとって、鉄は負の遺産であり、まちの特長ととらえる発想はなかったのでは。

家族で意思統一を徹底しておかなければ難しい。実際に、家族の様子を見に戻って亡くなった方もたくさんいらっしゃったわけです。鉄の文化も同じで、みんなが意識を共有していなければ、役立てることはできません。今の釜石をつくってきた歴史の核となつたのは鉄——このことが、共通認識として強く意味付けられていけば、もつとまちづくりにソフト面で活用できるのではないかと。「郷土史は精神の支柱だ」と言った人がいますが、歴史という側面から、もう少し地域の掘り起こしが必要だと思つています。

津波の記憶を伝承する 東北お遍路プロジェクト

新妻さんは「お遍路」という形で東北という広い地域を再生しようと思つていますね。

新妻——「東北お遍路プロジェクト」の第一段階として、青森の八戸から福島県いわき市まで53個所の巡礼地を選定しました。みなさんの地域で言いますと、釜石市は「私設こすもす公園」(写真2)と「鶴住居メモリアルパーク」の2箇所、名取市は関上漁港と日

和山、仙台空港、真山運河を選ばせていただきました。これで終わりではなく、今後10年ほどかけて100箇所くらいに広げていくつもりです。

お二方の取組みは、土地に根付いた伝統文化を掘り起こしてまちを再生するものでしたが、東北お遍路プロジェクトで目指しているのは、新しい文化を創造していくこと。それは何かというと、「津波の記憶の伝承」です。

被災地には過去の津波の碑が至る所に残っています。けれども、誰もがそんなものを忘れていた。私の地域でも、「津波なんて来やしない」と高を括って逃げなかった人たちがずいぶんいました。だから私は、津波の記憶を風化させないことが最大の防災だろうと思っています。東北を回り、津波の記録とともに、これまでの歴史も拾い集めることを私たちの活動の一つにしていくつもりです。

——広域だけに、意見がまとまりにくいといった「苦労があるのでは。」

新妻——確かに、自治体によって温度差はあります。私たちの取組みも、まだ認知されているとは言えません。これから実際にいろいろな人たちがお遍路で歩いてくれることによって、「う

ちのまちのこれも選んで」という声が上がってくると思います。それを毎年追加していくつつ、このプロジェクトを通して自治体がつながっていけばいいと思っています。

伝える側の思いと伝わり方の齟齬をどうするか

森——新妻さんの今のお話には、考えさせられますね。今回の被害を受けてわれわれは、自分たちの経験を後世に伝えたいと思う。同様に、1896(明治29)年や1933(昭和8)年の津波を体験した人々も、教訓を伝えたいと思って碑を建てた(写真3)。けれども、その思いは、震災前のわれわれにどれだけ伝わっていたのか。当時の人が期待したほどではなかったとすれば、われわれの思いもまた、後の世の人たちに同じ程度にしか感じてもらえないのではと危惧します。

石塚——情報をとらえる側の問題も

あります。「波はここまで来た、非常に怖いものだ」という気持ちで先人が津波石碑を残したのに、後世のわれわれは「ここまでしか来なかったから、この先は大丈夫だ」と逆にとらえてしまった。その結果、海沿いより内陸の



写真2 私設こすもす公園



写真3 両石の津波記念碑

方が、人的被害が大きくなってしまったのです。石碑を残すことに意義があるのではなく、何を後世の人に訴えかけるかを整理し、明確な活動として残すことが重要でしょう。

新妻——一方で、こんな例もあります。岩手県の普代村は、多くのマスコミが「水門(写真4)が村を守ったため、誰も亡くならなかった」と報道しました。けれども、現地へ行くと、「巡礼地の候補に、水門は選ばないでほしい」と言われたのです。「たまたま今回は波の角度がよかっただけで、水門があったから無事だったと思われる」と。誤ったメッセージにならないようにと、慎重に巡礼地を選考してく

ださっています。

森——津波の記事をスクラップしたときに感じたのですが、3月11日に限定して情報を集めようとすると、特別な活躍をした人の武勇伝ばかりになってしまう。これでは後の世代に伝わっていきません。それ以降、すべては復興に向けて着々と動いているわけですから、その過程についても記事を集めるべきだと反省しました。大切な

は、われわれがどんなプロセスで復興していくかを後世にしっかり見せること。いいまちづくりができれば、「復興のまち」自体が、一つの文化財になると思います。そうした観点から非常に興味深

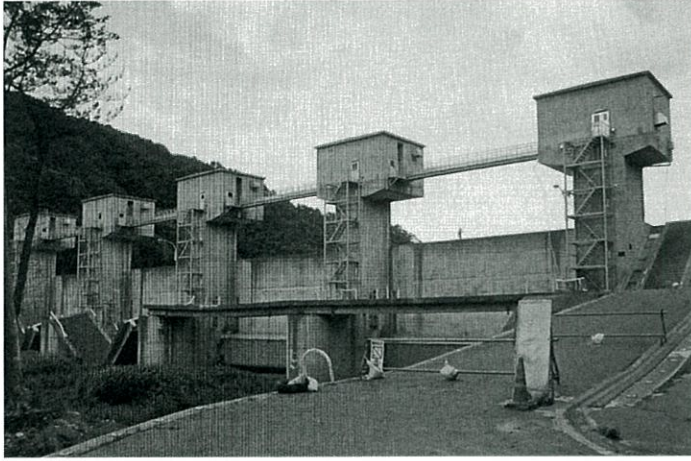


写真4 被災した普代水門

かったのが、新妻さんのお遍路プロジェクトの巡礼ポイントにも選ばれた「私設こすもす公園」です。この公園は、レストランを営んでいる産直農家が敷地を提供し、被災した子どもたちの遊び場として開放したものだ。ボランティアの活動拠点となったことがきっかけで協力の輪が広がり、被災地を支援する人たちが手づくりで整備したのです。

石塚——私は土木技術者なのでなおさら思うのですが、武勇伝や奇跡に頼らないと人が助からないような社会で

は駄目。インフラによって安全安心な社会をつくっていくのが本筋です。現代では道路や橋、あるいはニュータウンでも完成したときに最高の価値で、後は次第に価値が下がっていきます。ところが昔の門前町や城下町は、年を経て価値が上がるのです。法隆寺が優れた文化財であるのは、宮大工が常に手をかけて維持しているからで、そこが文化。閉上もいきなりまちが完成するわけではなく、何百年後に「いいまちだね」と言われるように育てていく。そういうことを継続してい

くのが重要ではないかと思えます。

後世に何をどう伝えていくか復興の力にもなる観光の活用

——活動の現場で、伝統文化や被災体験を伝承していく上の課題となっているのは、どのような点ですか。

石塚——閉上の場合、古いものも新しいものも全部流れてしまいました。残った伝統文化は何かと言えば、まちの歴史や人びとの暮らしその

ものしかありません。

実は閉上の再生を議論したときには、三つの選択肢がありました。一つは現地で閉上の営みを存続する。二つ目は、別の場所に閉上村を移す。三つ目は、ニュータウンのようなまったく新しいまちをつくる。漁業者もいなくなつたし、過去の伝統文化といつてもノスタルジーではないか。それより人びとの今のニーズである安全と快適を追求するべきだ、という意見です。

その中で、市はあえて現地再生を決断しました。だからこそ閉上の営みを継いだ、かつ安全なまちを築いていくことが大きな課題だと考えています。

森——鉾山を核とする企業城下町から観光都市への移行を目指す上で、私を感じているのはサービスの対価に関するギャップです。たとえば仙台の駐車場は15分で100円や200円は当たり前ですが、地元では「なぜお金を取るのか」と怒る人もいます。ずっと大企業に依存してきたために、「サービスは無料で当然」という感覚が染みついていっているのです。世界遺産となる鉾山は駅から40km離れているのでシャトルバスを出す予定なのですが、「運賃2000円なんて高い、誰がそんな

ものに乗るんだ」と言われてしまう(笑)。そこが難しいところです。

石塚——観光は「光を観る」と書くように、光っていないと成り立ちません。自分たちが大事に磨いて光らせているものを、他所の人たちから「価値がある」と認知してもらおうことが、本来の観光ではないかと思えますね。

森——世界遺産登録が現実に見え始め、ようやく今になって、地元の人々の心に「自分たちのまちはすごいんだ」という意識が芽生え始めているように感じます。

石塚——自分たちの大事なものは何なのかをきちんと見極める、発見することから始める必要があると思えます。閉上の人も、自分たちの暮らし方が大事なものだとは認識していません。けれども、なくなつてから気づいても取り返しがつかないのです。

新妻——発見したら、それをどう見せていくかも大事ではないでしょうか。新潟県中越地震で大変な被害を受けた新潟の山古志村も、今では年間100万人もの観光客が訪れるようになりました。彼らの伝統文化、棚田を守りながら復興したその姿を見に、人が来ているのです。訪れる人を増や

してまち興しをすることは、被災地にとつて大きなメリットになると思いま
す。

石塚——店舗を流された商店が仮設
に集まった「復興商店町」も、場所に
よつてはかなり人が来ています。被
災前よりも収入が上がった店さえあ
ると聞きます。お客さんも最初は支援
が目的だったかもしれませんが、今は
「大変な状況の中で頑張っている人が
こんなに大勢いる」という事実を見に
来るのではないかと思います。前向き
な姿を見ることが、被災地に人を呼
び込む力になっているのではないで
しょうか。

震災の記憶を風化させない ツールとしての物語と教訓

新妻——私はお遍路プロジェクトを
各地のまちづくりに積極的に利用して
もらいたいと思っています。岩手県野
田村の村長は「国道沿いを巡礼ポイン
トに選んでも通過されるだけだから、
まちなかにポイントを選んでほしい」
とおっしゃった。そうすることで、食
堂や土産店にお金が落ちるからと。
ちょうどまちなかには、昭和の大津
波の時に、多くの人が枝にぶら下がっ

て助かったというカエデの木が残って
いました。それを物語として伝えてい
くことで、防災意識が芽生えたり、津
波の歴史が語り継がれていたりする
ツールになります。そうやって、「お遍
路をまちづくりに積極的に活用して、
育てていってください」と私たちは話
しているのです。

四国のお遍路には「お接待」という
風習があります。巡礼地を回るお遍路
さんに、地元の家々がお茶やご飯を用
意したりする。東北をお遍路さんがた
くさん歩くようになれば、人懐っこい
東北の人たちは、四国に負けないお接
待をすると思います。本家のお遍路は
弘法大師の足跡を踏むことがベースに
なっていますが、東北お遍路には何の
宗教もありません。純粹に津波の記憶
に対して手を合わせ、頭を垂れるため
の「このころのみち」なのです。だから
どなたでも来ていただけます。

石塚——事実を記録するだけでなく、
物語の中に震災や津波の教訓も込めら
れたらいいですね。
森——釜石の巡礼ポイントになっ
ている鶴住居防災センターの話は、
大きな代償を払って得た教訓です。
1933（昭和8）年のときは、建物

の手前までしか津波が来なかった。3
月3日、その津波のあった日に、防災
センターで避難訓練をやっています。

このとき、本来は山に逃げるところ
を、高齢者は大変だからと、防災セン
ターを避難場所にするのを町内会と
決めたのです。このため、3・11では
多くの人がここに逃げてきてしまっ
た。これは負の教訓です。建物の遺構
を残すかどうか懸案となり、結局壊し
てメモリアルパークにつくり直すこと
になりました。津波の避難所指定はし
ていなかったのに、誤解を生むような
ことをしてしまったという記憶を残す
ためです。

新妻——「津波でんでんこ」の釜石に
実際に行ってみて、津波の歴史がほか
とは全然違うと感じました。ビジネス
ホテルには、「自力で逃げてください、
ここまで何分で行けます」と避難ルー
トを描いたリーフレットが各部屋に
置いてあるのです。私の故郷、松川浦
の旅館には、そういうものはありませ
ん。私たちがそうした情報を発信して
いくことで、「うちも見習おう、情報共
有していこう」という気運が高まるで
しょう。お互いの知恵を確認しあう機
会になればいいと思っています。

1000年先まで残すには 先人の知恵に習う

——世代を越えて、それこそ1000
年、1000年先を見ながら人にどの
ように伝え残していけばいいのか、考
えると非常に難しいですね。

石塚——昔の人は、あらゆる手段を
使って教訓を残そうとしました。多賀
城市にある「末の松山」は、平安時代
に貞観地震の津波が襲ったと言われて
おり、この地名が「浪」という言葉と
ともに多くの和歌に詠まれています。
文学に限らず、お祭りなどの風習も災
害の記憶を残すための一つの方法と言
えるでしょう。ただ残せばいいという
のではなく、今回の津波をきちんと検
証した上で、残すべきことを整理して
誤解を与えないような形で後世の人に
伝える必要があります。

新妻——今回の津波の到達点を見て
いくと、その先に点々と神社が建って
いるのに気づきます。仙台市にある
「浪分神社」は、そこで本当に津波が分
かれたそうです。相馬市には「津神社」
があつて、地域の人は「あそこまで逃
げれば津波から助かる」と語り継いで
いた。やはり、語り継ぐことが最大の



写真5 座談会の様子

防災になるのではないのでしょうか。そうやって地域が自分たちの巡礼地を育てていってくれたらいいと思うのです。それが地域の収益にもつながっていきます。

今後は、手始めにツアーを企画して人に来ていただく。地図やガイドブックもつくるつもりです。その他、紙芝居の語り部を育てていくことなども考えています。東北お遍路は商標登録をしています。これを自由に使うお土産品の開発などにも活用していただきたい。そういうソフト面から被災地を手助けしていきたいと考えています。

森—— 減災や防災にハードは必要不

可欠ですし、「目に見える形の復興」という面でもハードは重要ですが、限界もある。それをソフトで補っていくことが大切だと思います。

—— 地震から4年たち、津波の痕跡を見せておこうと、初めて自分の子どもを沿岸に連れて行きました。写真も。でも、子どもは自分のことと思っで見えていません。どうすれば子らに伝え続けていけるのか。防災教育の難しさを痛感しました。

新妻—— いわき市の「勿来記憶の広場」では、被災した家族ら70人がメッセージを入れたタイムカプセルを埋めることになっています。20年後にカプセルを開いて、記憶をつないでいくのが狙いです。子どもたちは広場に苗木を植えて育てていく。そうして今の幼稚園児が、やがては自分の孫に「これはじいさんたちが植えた木だ」と語り継いでもらう計画です。

森—— 僕は逆に、伝わらない、残らないことを前提として取り組んだ方がいいと思っています。「こんな被害を受けたから覚えておけ」というのではなく、「明治や昭和の津波のことを自分たちは忘れていた。その結果こうなっている」と子どもたちに教えることも

重要ではないのでしょうか。

観光ボランティアガイドの中には、あえて家屋を流された体験を語る人もいます。しかし、それを経験していない人が同じように実感を込めて話すのは難しい。世代交代をしたら、語り継ぎはできなくなってしまう。そうではなく、聞く方の立場になって、どうすれば残るかを考えていきたいのです。決して押しつけてはいけなと思っています。

石塚—— 京都の桜守で有名な佐野藤右衛門さんが、被災地に桜の若木を植える活動をなさっています。千年たつて、そこに大きくなった桜が残っていれば、その間、津波が来なかったとわかる。毎年、桜の木を見て無事を感じ謝する—— そういう新しい風習をつくっていくのも大切かもしれません。

新妻—— 人間のやることは、自然の力にはかないません。明治以降、相馬市の松川浦周辺にあった潟湖は埋められ干拓されましたが、津波で再び明治の地図の状態に戻ってしまいました。私の家は「南ノ入」という地名ですが、がれきが押し寄せて、そこだけ半島のように残ったのです。「ああ、本当に南の入り江だったのだ」と初めて気がつ

きました。地形が変わっても、地名はずっと残っていたのですね。このように、忘れていたことをもう一度洗い出して、なんとか次の世代につなげていきたいものです。

石塚—— 津波に関連すると思われる地名は結構ありますね。宮城にも「波伝谷」という集落があります。しかし、今の世の中は、こうした歴史を残すのを嫌って、きれいな名前をつけたがる。地価に影響するせいか、土地の特性を表した地名がどんどん消えていく傾向にあります。

森—— そういう古い土地の名を残していくこともわれわれの務めですね。石塚—— 私ら土木技術者は、自然をうまく利用しながら社会インフラをつくっていくかなければなりません。そういう意味では、自然の営みに謙虚で、敏感でいなければならない。大地が震えて起こる津波は、自然の営みそのもの。過去の歴史を鑑みながら、大地の理を想定してまちをつくる力が問われているのだと思います。

—— 今日ありがとうございます。

【執筆】三上美絵
【撮影】佐藤拓人